

2010年(平成22年)8月18日(水曜日)

児童虐待未然に防げ

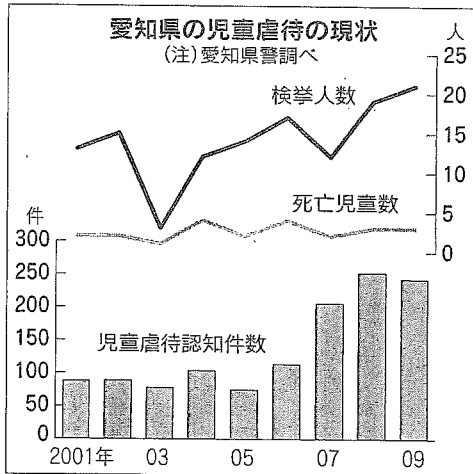
児童虐待事件が後を絶たない。このため愛知県知多市では、特定非営利活動法人(NPO法人)と行政が協力して虐待を防ぐ取り組みが始まった。専門知識を身につけた訪問員が定期的に母子のもとを訪ね、良好な親子関係を築くのを後押しする。虐待は児童相談所などの行政機関が事前に介入できないまま悲劇に至るケースが多い。知多市の取り組みは対策の糸口として注目されている。

知多市、NPOと協力

大阪市のマンションでは複数回あった。母子は7月、2児の遺体が見つかった事件。2児を冷房を切った室内に長期開放置いたまま家を出ていた23歳の母親が殺人容疑などで逮捕された。虐待を防げそうな機会を受け、名古屋市の児童

専門員が家庭訪問

リスク点数化し育児支援



相談所が母親に電話連絡したが「困っていることはない」などと回答したため、対策は講じられなかった。大阪市に母子が転居した。同市の児童相談

に見つけるのは難しい(名古屋児童福祉センター)と期待する。すでに虐待されているという確証がなければ動きにくいのが現状の行政の対応だ。こうした問題点を踏まえ、知多市が進めるのは専門性を高めた家庭訪問員による児童虐待防止プログラム。同市は虐待の予防活動に力を入れるNPO法人「子どもの虐待防止ネットワーク・あいち(CAPNA)」(名古屋)と協力。CAPNAが作成したプログラムを使い、訪問員を養成する。

同市は10月にも訪問員の養成講座を開き、保育士や保健師の資格を持つ市民ら数十人が参加する見通し。早ければ年明けに実際に訪問員が家庭を回る計画で、同市の子育て支援課の日比野紀子課長は「市民も巻き込んで虐待の予防に力を入れた」と期待する。

プログラムの特徴は「米国でも実施されている『両親調査』による虐待リスクの数値化」(CAPNAの今西洋子事務局長)。乳児のいる家庭を訪問員が訪れ、両親の成育歴、経済状況、地域との関係、夫婦関係など10項目ほどをチェックし、虐待が起るリスクを点数化する。

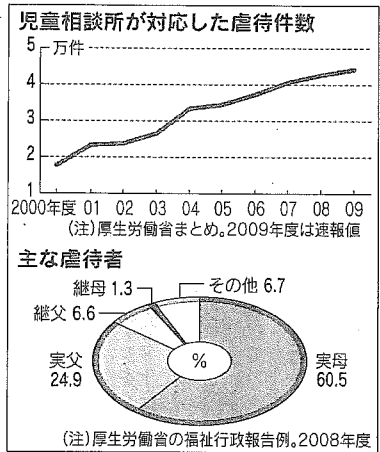
リスクが一定以上、高い場合は訪問員による子育て支援を実施。良い親子関係をしてくれるよう定期的に家庭をたずねて相談に乗ることで、虐待に発展する可能性を早期に減らす。名古屋学芸大学の坂鏡子准教授(子育て支援論)によると「米国では家庭訪問支援を実施した家庭の虐待発生件数が実施していない家庭に比べ、ほと

は半分になったという調査結果もある」という。坂鏡教授は「厚生労働省も虐待の予防に力を入れようとしているが、具体的なプログラムやノウハウにはまだ乏しい」と指摘。「知多市のように体系的な取り組みは全国でも少ない」と話す。

らいいプラス

子育てが こわい

各地で相次ぐ子どもへの虐待。子どもの保護が最優先されるが、それだけでは問題は解決しない。児童相談所などは早期発見や予防に力を注ぐ一方で、虐待後の親子のきずなを取り戻す「再統合」を手助けする。「やり直したい」と願う親と支援者が家族のあり方を模索する。

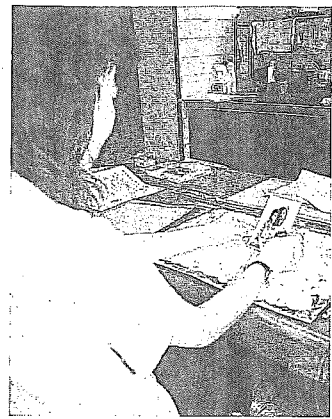


「また一緒に暮らしたい」

ス(FGC)「がそれだ。これまで保護した子どもを児童養護施設などに預けるか、家庭に戻すかは、相談所が判断していた。これに対してFGCは、当事者である親子と親族、知人なども交えて家族の課題を話し合い、今後の家族の形について考える。「虐待した親は自分の子育てが間違っていたと感じ、子どもとどう向き合っていくかわからない。親自身が答えを見つけてのを手助けする」(担当者)

「私を親から虐待を受けた。私もお母さんや子育てに悩む親たちを支援する社会福祉法人「子ども虐待防止センター」(東京都世田谷区。グループケアでは虐待した親が集まり、自分の気持ちを打ち明ける。「私は周りとは違う。子どもをかわいがれない」。ある女性の言葉にほかの参加者がうなずく。子どもを愛せない。その後ろめたい気持ちには夫にも友達にも言えない。「彼女たちの孤立

感や絶望感は想像を超えている」(相談員の天野智子さん)。孤立を共有することが参加者を癒やす。「毎朝子どもが起きてくるのが怖かった」と語る主婦B美さん(34)は08年、虐待した親の心の回復を促す「MY TRIBE」プログラムを受け、虐待防止の人材を育成する「エンバメント・センター」(兵庫県西宮市)による4カ月の研修だ。当時3歳の長男を怒鳴り、手を上げ、おびえた顔を見て「さらに腹が立った」。やめようと思いついた。手を止めた。その繰り返しが続いた。プログラムでは感情のコントロールやしつけを学んだ。ほかの参加者の話を聞くうちに自分を責め続けた気持ちが薄らぎ、手を上げなくなった。ふと、これまで自分の気持ちを息子に言わなかったことに気づいた。「お母さんは今つらいの。たいていごめんね」。すると息子は「ほへ、お母さんのこと大好きだよ」と必死にしがみついていた。希望が見えたと感じた。子ども虐待防止センターで20年近く相談員を務めてきた理事の広岡智子さんは、「親子だからといって無理に近づけるのではなく、距離や時間をお互いに必要とする」と指摘する。支援者にとって大切なのは、やり直したいという虐待者の気持ちを信じること。親子関係を取り戻す努力が、虐待解決の道筋をつける。



別居中の娘と撮った写真を見つめる。娘も同じ写真を持っている

親権制限で民法改正へ

深刻な虐待が急増するなかで、法務省は「親権」の制限に向けた民法の改正を検討している。親権は未成年の子どもを育てる親としての権利や義務で、民法で定められている。親は子どもの利益に反することはできません。親

権の乱用があった場合に家庭裁判所が親権をほく奪することができる。ただ、これまでは、養子が認められたケースは、施設長らの判断を親より優先させる方向だ。実現すれば親権を理由に、治療を拒んだり学校を辞めさせたりすることができなくなるという。

民法改正と合わせて児童福祉法改正も検討、虐待を受けた子どもについても、施設長らの判断を親より優先させる方向だ。実現すれば親権を理由に、治療を拒んだり学校を辞めさせたりすることができなくなるという。

伊藤孝、古山和弘が担当しました。

関西地方に住むA子さん(55)は虐待が原因で娘と別居し、6年がたつ。7年前、当時1歳の娘を「おまんこが生まれてこなければよかった」とたたいた。泣きやまないからと部屋にこじ込めたこともある。40歳を過ぎての高齢出産。すでに母は亡くなり、育児の悩みを誰にも相談できなかった。たまったストレスを子どもにぶつけ、昼間から酒を飲み、夫にビール瓶を振り回した。「このままでは娘を傷つけてしまつて、自分の自治体に連絡し、子どもを施設に預ける決心をした。だが夫が娘を引き取り、家を出ていった。Aさんは今、家族の暴

力問題に悩む人を支援する民間施設「日本家族再生センター」(京都市)でカウンセリングを受け、性格を見つめ直すグループワークに参加している。「私が変わればまた、親子で暮らせるかもしれない」

2009年度、全国の児童相談所が対応した児童虐待件数は4万4210件と過去最多。児童養護施設などで保護する子どもも増えている。だが、親子を離した後に、虐待を引き起こす問題に対する支援や治療をして、家族が再び一緒に暮らせるようにすることが次の課題となる。児童虐待防止法が成立して10年。親子を再び家族として結びつける「家族再統合プログラム」を導入する児童相談所が相次ぐ。神奈川県中央児童相談所は07年、全国でも珍しい試みを行った。虐待後の家族再生を支援する「ファミリーグループ・カンファレンス

児童相談所や民間施設 虐待後の家族 「再統合」支援

「私を親から虐待を受けた。私もお母さんや子育てに悩む親たちを支援する社会福祉法人「子ども虐待防止センター」(東京都世田谷区。グループケアでは虐待した親が集まり、自分の気持ちを打ち明ける。「私は周りとは違う。子どもをかわいがれない」。ある女性の言葉にほかの参加者がうなずく。子どもを愛せない。その後ろめたい気持ちには夫にも友達にも言えない。「彼女たちの孤立

感や絶望感は想像を超えている」(相談員の天野智子さん)。孤立を共有することが参加者を癒やす。「毎朝子どもが起きてくるのが怖かった」と語る主婦B美さん(34)は08年、虐待した親の心の回復を促す「MY TRIBE」プログラムを受け、虐待防止の人材を育成する「エンバメント・センター」(兵庫県西宮市)による4カ月の研修だ。当時3歳の長男を怒鳴り、手を上げ、おびえた顔を見て「さらに腹が立った」。やめようと思いついた。手を止めた。その繰り返しが続いた。プログラムでは感情のコントロールやしつけを学んだ。ほかの参加者の話を聞くうちに自分を責め続けた気持ちが薄らぎ、手を上げなくなった。ふと、これまで自分の気持ちを息子に言わなかったことに気づいた。「お母さんは今つらいの。たいていごめんね」。すると息子は「ほへ、お母さんのこと大好きだよ」と必死にしがみついていた。希望が見えたと感じた。子ども虐待防止センターで20年近く相談員を務めてきた理事の広岡智子さんは、「親子だからといって無理に近づけるのではなく、距離や時間をお互いに必要とする」と指摘する。支援者にとって大切なのは、やり直したいという虐待者の気持ちを信じること。親子関係を取り戻す努力が、虐待解決の道筋をつける。